

(3) 機械設備・給排水衛生設備

建物内は公開し一般の来訪者が入場するため、多くの人が滞在する部屋には空調設備を設置した。空調は電気式ヒートポンプパッケージエアコン（ビル用マルチタイプおよびルームエアコン）とした。建物内で復元する部屋については、創建時の冷暖房吹き出し口を確認できなかったことから、床置露出型とした。また、現代の整備で設置したことを明確にした。事務室や倉庫などは、部屋の大きさに応じて壁掛、一方向吹出式などを採用した。西側別棟は設置されていた壁掛け型と同様のパッケージ型エアコンを設置し、エアコンの集中リモコンを事務室に設けた。

また検討の結果、近衛文麿居住期からほぼ当時の姿で残る「書斎」と「応接室」、「客間」については配管のための貫通などが困難となることから、空調設備を設置しなかった。廊下には空調機を設置できないため、各室の空調機的能力に廊下の空調負荷を見込んだ。空調機の屋外機は、屋外の物置内部に設置した。

配管ルートは発掘調査の結果を考慮した結果、空調は室外機のある物置から蔵の通気口部分を改良し建物内に接続するほか、ドレン配管は天井裏からパイプスペースを設置し床下に下ろし、土台下の布石部分で新規材となる場所や土台上の新規腰壁に開口を設け、浸透枳に排出した。別棟など、床下の既存布基礎を貫通できない部分は、床下で雑排水管に接続し排出した。実際の配管方法については、解体後の工事のなかで決定した。また、展示用の来客用手洗については、給排水を整備しなかった。

(4) 換気設備

トイレおよび流し廻りには、換気設備（3種）を設けた。一般居室は自然換気とするが、建物全体の換気のために天井内にシロココファンを設け、主屋北側部分で新設する壁面を選び、排気した。

外部に露出するウェザーカバーは鋼板製とし、建物の外壁に合わせた色に焼付塗装した製品とした。大便器はリモコン式温水洗浄便座（タンク式）、小便器は低リップ節水感知FVとし洗面器は自動水栓とした。バリアフリースイレに車椅子 対応便器、オストメイト用流し、ベビーチェア等を設置した。

また、トイレのほか、来訪者への喫茶対応に伴い簡易な厨房として別棟台所を再利用するため、小型の衛生器具設備を設置した。別棟台所には、流しに混合水栓を設置し、貯湯式電気温水器にて給湯した。

(5) 給水設備

既設給水引込み管を再利用し、30mm量水器を敷地北側に設置し、直結給水方式にて各所へ給水した。屋外には数カ所、屋外立水栓を設置した。

(6) 排水設備

屋内は汚水・雑排水分流方式とし、屋外排水枳で合流させ、新たに公設枍を設置し、公共下水道に放流した。

建物からの雨水縦樋には浸透枍を設けたが、建物周辺の発掘調査から、当時の配管を残したかたちでの配管ルートが設定できないことから自然浸透とし配管接続は行わなかった。

第5節 内装および家具調度の復元

創建時に別邸として建てられ、その後も住宅として使われた荻外荘には、家具や調度品などが写った古写真が数多く残されている。また政治会談時の写真では、近衛文麿居住期の「客間」の姿が鮮明に残されている。このため、荻外荘では当時の雰囲気再現し、歴史的に重要である近衛文麿の住宅兼政治会談の場としての姿を公開することとなった。

特に「客間」を初めとする重要な3室（「客間」「応接室」「食堂」）については、壁や床などの内装や家具、照明器具までを復元した。

「客間」については、昭和15（1940）年7月19日の荻窪会談時の古写真をもとに、配置されていた調度品までを再現することとなり、その他の部屋については、古写真から可能な限り、調度品をレプリカ等で再現し配置した。

実施設計では壁、床仕上げ、天井の仕上げと家具、照明器具、そのほかの調度品を対象として復元を行った。設計段階では古写真などの資料から形状や主な意匠などを推定し、工事段階でカラー化検討のほか、類例などを参考に詳細な検討を行い、製作を行った。

施工段階では、詳細な検討により大きさや意匠などを決定したことから、製作の過程については施工の部分に記載し、ここでは内装および家具調度に関する設計段階での経緯と決定事項について記載する。

調度品製作の詳細については「第4章 第6節 展示設計」を参照。

（1）家具および調度の復元概要

応接室

- ・掛け軸や調度品などは、近衛家旧蔵品や古写真などをもとに、「創建時の内装・家具を活かして近衛家が使っていた」という想定でレプリカを製作して配置する。
- ・西面の大きな掛け軸は中国製と思われるが、絵の細部が確認できないことから、再現は行わない。

客間

- ・小物などは古写真のほか、陽明文庫所蔵品や近衛家旧蔵品をもとにレプリカを製作して配置する。

来客用手洗

- ・同時代の邸宅建築で、荻外荘の設計者である伊東忠太が関与したとされる「有隣荘」を参考に洗面器や照明器具を再現し、廊下から見学できるようにする。

食堂

- ・映像による建物ガイダンスの場所とし、古写真から再現した家具は実際に使用できるようにする。
- ・古写真は入澤居住期のものが確認されている。「主な家具と照明器具は、近衛家でも引き続き使っていた」と想定し、古写真をもとに主な家具を復元する。キャビネット内には近衛家が使用していた食器を配置する。
- ・壁の絵は近衛文麿肖像画のレプリカを配置する。家具の上には違和感のないようケースを配置するほか、映像機器などは部屋の雰囲気に合わせたカバーを設置する。

書斎

- ・部屋には入室せず「居間」や広縁側から見学する。
- ・「近衛文麿最期の決断の場」としての厳粛な雰囲気を伝えつつ、近衛が「書斎」として使っていた調度などを配置する。
- ・杉並区教育委員会が所蔵する実物や、そのレプリカを展示する。「近衛の自決前後の状況を示す文献」「自決直後の新聞記事」「戦後の書斎写真」などから調度品を選定する。

庭園

- ・荻外荘内には、中国風の陶製ガーデンテーブルとイスが保管されている。この陶製ガーデンテーブルとイスは、近衛文麿居住期の古写真では客間前の庭園で近衛本人と写っている写真のほか、南側庭園の藤棚の下に配置されている写真があり、近衛本人が好んだものと想定される。
- ・レプリカを作成し、展示公開する。

(2) 家具

① 設計の方針

家具は、創建時の古写真と、昭和15（1940）年7月19日の荻窪会談時の報道写真などの写真で確認できる意匠をもとに「応接室」「客間」「食堂」および広縁の家具を復元した。

昭和15（1940）年の「客間」における政治会談の写真と創建時の古写真を比較すると、復元期である近衛文麿居住期には、創建時と同じ家具が「客間」で使われていることが確認できる。一方で文麿居住期の「応接室」は中国風の別の家具となっており、「食堂」は文麿居住期の写真が確認できない。

現存する古写真では、「応接室」「客間」「食堂」の創建時写真（個人蔵・日本建築学会建築博物館蔵）の資料が確認でき、参考となる。

このような資料の確認状況から、接客空間である主要3室は創建時の家具を再現することとした。

創建時の家具のうち、「応接室」は古写真で確認できる螺鈿家具の中国風テーブルとチェアおよびコンソールテーブル、「客間」は報道写真で確認できる布張りのソファとテーブル、キャビネットなどの洋家具のほか、創建時写真で確認できる家具一式、「食堂」はダイニングテーブルとチェア、キャビネットなどを製作した。広縁には、近衛がくつろ

いで座っていた報道写真から、ソファとテーブルを再現した。

彫刻や螺鈿の意匠については、古写真や類似資料をもとに原案を作成し、施工段階で決定した。家具の主な図面については資料編のなかで掲載している。このため、本項では復元する家具の一覧と根拠とした資料を掲載している。

② 復元家具の設計根拠

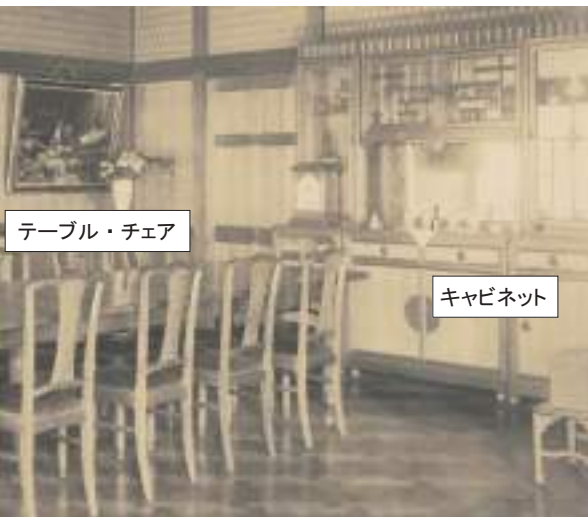
復元家具はいずれも現存していないため、主な形状は古写真をもとに再現した。「応接室」の中国風家具については、古写真から螺鈿家具であると確認できたため、国内に現存する同時期の螺鈿家具なども参考とした。

古写真が根拠となるため、家具は外観復元を基本としたが、古写真から判断できる限り当時の技法や材料を推定し、実際に使用することも考え設計した。なお「食堂」は一般の来訪者が使用するため、維持管理しやすい材料や形状とし、テーブルは古写真のような一体形ではなく分割して再現した。

表4-3 復元家具一覧表

部屋名	名称	数量	単位	参考資料	主な仕様
応接室	中国風テーブル	1	台	創建時古写真 新宿御苑「旧御涼亭」 〔台湾閣〕家具	チェリー材 摺漆仕上、ヤコウガイ嵌入
	中国風チェア	4	脚		チェリー材 摺漆仕上
	中国風コンソールテーブル	1	台		チェリー材 ウレタン仕上
客間	丸テーブル	1	台	創建時古写真および昭和15年報道写真	サクラ材ウレタン仕上
	布張り椅子	4	脚		サクラ材ウレタン仕上、ベルベット張り地、飾紐
	一人掛けソファ1（渦模様、脚付）	2	脚		サクラ材ウレタン仕上、大理石張り
	一人掛けソファ2（布張り）	2	脚		サクラ材ウレタン塗装 鏡面仕上
	飾り台（花台）	1	台		サクラ材ウレタン塗装 全ツヤ仕上、ガラス扉、鍵付
	テーブル	1	台		サクラ材ウレタン塗装 つや消し仕上
	キャビネット	1	台		サクラ材ウレタン着色塗装つや消し仕上げ
	サイドテーブル	1	台		サクラ材ウレタン着色塗装つや消し仕上、ビニールレザー張
食堂	ダイニングテーブル	1	式	創建時古写真	オーク材練付、ウレタン着色塗装つや消し仕上、
	ダイニングチェア	11	脚		オーク材ウレタン着色塗装つや消し仕上、ガラス扉、扉手かけ金物
	チェスト	1	台		サクラ材ウレタン着色塗装つや消し仕上、
	キャビネット	1	台		サクラ材ウレタン着色塗装つや消し仕上、
広縁	八角テーブル	1	台	昭和13年報道写真	サクラ材ウレタン着色塗装つや消し仕上、
	一人掛けアームチェア	1	脚		サクラ材ウレタン着色塗装つや消し仕上、ベルベット張地

表 4-4 家具参考古写真・類例一覧

部屋名	参考とした古写真等
応接室	コンソールテーブル  中国風テーブル・チェア 応接室 創建時古写真（個人蔵）  新宿御苑 御涼亭花台 （環境省新宿御苑管理事務所）
客間	 キャビネット 飾り台 丸テーブル 一人掛けソファ2 一人掛けソファ1 布張り椅子 テーブル 客間 創建時古写真（個人蔵）
食堂・広縁	 テーブル・チェア キャビネット  々悠にそよを音雑 ふけふのきのんさ衛近 広縁・アームチェア・八角テーブル （読売新聞 昭和13年4月10日付） 食堂 創建時古写真（個人蔵）

家具の彫刻や螺鈿文様などの意匠のうち、主なものについては、「表4-5」に意匠の名称およびその形状とした根拠を記載した。

実際の文様については、資料編に家具図面を記載している。

表4-5 家具彫刻、意匠根拠一覧				
部屋名	家具	家具部位	意匠	根拠
応接室	中国風テーブル	脚先	クロウ&ボール	創建時古写真のほか、当時の中国家具に使用されている意匠と推定した。
		脚部（中央）	四弁唐花文	創建時古写真より推定した。
		脚部（上部）	梅に鳥	創建時古写真より推定した。
		側面（上部）	宝相華唐草文	創建時古写真より、中国の唐草文である宝相華と推定した。
		側面（上部）	四弁唐花文	創建時古写真より推定した。
		側面（端部）	柘榴文	創建時古写真より、唐草に実が確認できたため、実のある唐草文として、柘榴と推定した。
		側面中央	透かし文様（梅にカササギ）	創建時古写真からわずかに5弁の花びらが確認できたこと、鳥の羽のように伸びる文様が確認できたことから、梅と鳥であると推定した、中国の吉祥文では梅にカササギという組み合わせがあることから、鳥はカササギとし意匠を作成した。
		側面（丸文）	梅	創建時古写真では不鮮明であったが、丸文があることは確認できたため、中央とあわせた梅文様とした。
	中国風チェア	脚部	葡萄	創建時古写真に枝と実が写っていたことから、葡萄文とした。
		座面	梅	創建時古写真では不鮮明だが、側面中央は古写真から宝相華唐草であると想定したことから、同じ宝相華唐草文とした。
		背板	瓜	創建時古写真より、大きな実と蔓、葉が確認できたこと、御涼亭の家具彫刻にも瓜文様があったことから推定した。
	中国風コンソールテーブル	脚部	アカンサス文様	ヨーロッパ家具の脚部などに見られる細いアカンサス文様を参考に意匠を製作した。
		正面板	柘榴唐草	創建時古写真からわずかに確認できる葉と実の状態から、中国の吉祥文である柘榴の意匠とした。
		立ち上がり正面	アカンサス文様	創建時古写真と類例から、アカンサス文様と推定した。
		立ち上がり側面	無地	古写真から文様が確認できなかったため、無地とした。
		上面	無地	古写真から文様が確認できなかったため、無地とした。
客間	一人掛けソファ	側面	渦文	荻窪会談時の報道写真を参考とした。
		肘掛け	両端紐付き	古写真をカラー化し詳細に確認したところ、肘掛け両端部に光の反射が確認されたため、肘掛けは紐付きであると想定した。
	テーブル	側面彫刻		古写真をカラー化し詳細に確認したところ、側面には同じ色と質感の浮き彫り彫刻が確認された。形状は詳細には確認できなかったが、建物内で他に類似するものとして、車寄花狭間の彫刻意匠を参考に作成した。
食堂	キャビネット	上部支輪	凹凸型	上部の支輪の事例は極めて少なく、複雑な形状と想定されたが、確認された家具事例から、比較的シンプルな凹凸型とした。
		中央レリーフ	葡萄栗鼠	古写真からは葡萄文が確認されるが、家具には渦文などの唐草文があり、西洋風の意匠とは異なることから、東アジアに多く見られる葡萄に栗鼠の文様「葡萄栗鼠」であると推定し、葡萄の葉や実に隠れる栗鼠の姿をモチーフとする彫刻とした。
		下段フェイスプレート	唐草文鋳物	家具の開き戸に鍵や金属製プレートが設置されるのは、中国製家具に多く見られる特徴である。このため、中国家具のフェイスプレートなどを参考に、唐草文として意匠を決定した。
		つまみ	菊座鋳物	古写真をカラー化した際、金属のような質感と光沢があることが確認されたことから、木製ではなく鋳物のつまみとした。形状は詳細には確認できなかったため、菊座とした。

(3) 照明器具

① 考察

復元照明のうち、現存している照明器具は巢鴨棟の廊下にあった壁付照明器具1灯のみであり、そのほかは客間の吊下式照明の真鍮製フランジ4個が現存していた。これらは復元の参考としたが、それ以外のほぼすべての器具は古写真をもとに再現することとなった。

設計段階では色などがわからなかったものの、形状や寸法は古写真から分析を行い、部屋の重要度に応じて復元の方針をA～Dの4段階に分けた。

以下がその方針である。

A：資料や類例などの調査に基づき、当時の仕様（主な材料、外観、製法）を復元するもの。実際の所蔵品（現物）をもとにレプリカを作成する。

B：資料や類例などに基づき復元するが、資料が少ないため外観のみを復元するもの。

また実際の所蔵品の写真などからレプリカを作成するもの。不特定多数が使用する可能性があるため、仕上げなどはメンテナンスしやすく、一般的に入手しやすい材料、下地とする。

C：雰囲気に合わせて製作するもの。

D：雰囲気にあわせた既製品。

復元照明のほか、Dのような既製品なども含めた最終の復元照明は「第7章 第2節（13）内装工事 ⑨復元照明」で記載している。

② 照明器具の類例

古写真では確定できない部屋のうち、近衛文麿居住期に増築・改修された部屋については、近衛家の特殊な歴史資料館である、京都陽明文庫の閲覧所「虎山荘」（国登録有形文化財、昭和17（1942）年）に現存する照明を調査し再現した。

そのほか、古写真がない「来客用手洗」については、天井の格天井部分にも痕跡がなく、同時代の類例からは壁付け照明の可能性もあったが、痕跡がなく確認できないため、伊東忠太が設計に関与したとされる「有隣荘（大原美術館内）」和館1階トイレの照明器具のレプリカを設置した。

また正門の照明器具は、現存する石張り門柱上に配管痕跡があり、照明器具があったことは確認できたが、戦前の報道写真では形状が不鮮明であったため、入澤居住期の東門古写真をもとに再現した。

そのほか、「客間」のシャンデリアは、古写真から金属側面に唐草文様が確認できたが、これらは類例の照明器具のほか、伊東忠太が設計し、意匠に関与したとされる照明器具などの唐草文様を参考した。

照明器具の復元にあたり参考とした古写真や事例については、次ページの表にまとめて掲載した。

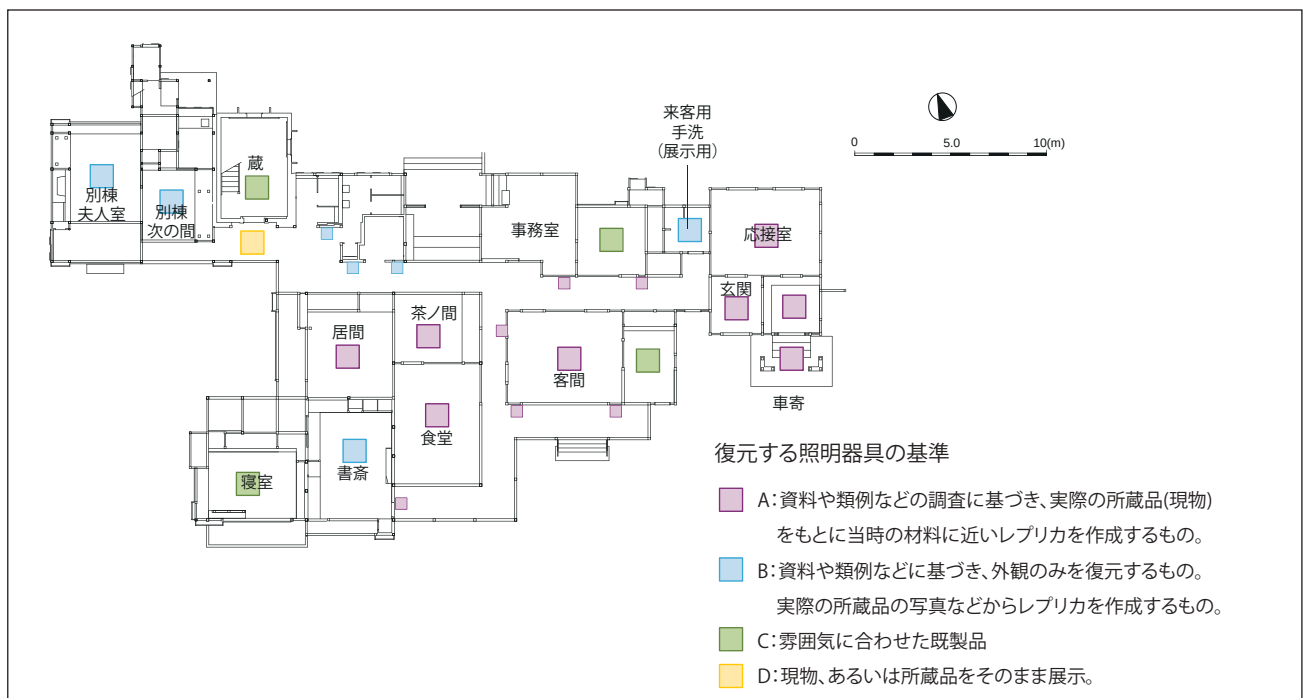


図 4-23 照明器具復元区分図

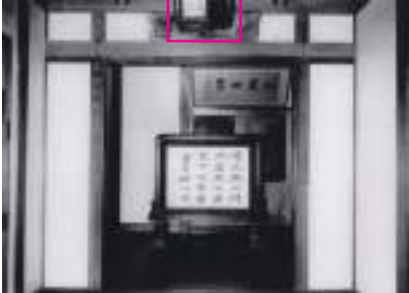
表 4-6 主な復元照明の根拠資料			
部屋名	車寄 ペンダント	玄関土間・玄関 ペンダント	応接室 中国風宮灯
復元区分	A	A	A
参考資料	昭和 15 年報道写真（朝日新聞社提供）	創建時玄関写真（個人蔵）	創建時写真（入澤邸東門）（個人蔵）
画像			
			
部屋名	寝室北側廊下および居間・茶ノ間北側廊下、広縁、ブラケット	茶ノ間 ペンダント	応接室 シャンデリア
復元区分	A	A	A
参考資料	現存品（移築建物に1ヶ所現存）	創建時 茶ノ間写真	創建時 応接室写真
画像			
	写真 現存するブラケット照明（撮影 日暮雄一） 	古写真（日本建築学会建築博物館蔵） 	古写真（日本建築学会建築博物館蔵） 
	古写真 広縁と照明（個人蔵）		

表 4-7 主な復元照明の根拠資料 2			
部屋名	客間 シャンデリア		居間 ペンダント
復元区分	A		A
参考資料	創建時 客間写真	シャンデリア側面唐草文様類例	創建時 居間写真
画像			
	 古写真（個人蔵）	本間美術館清遠閣 2 階（山形県酒田市）  築地本願寺外部ブランケット	 古写真（日本建築学会建築博物館蔵）
部屋名	食堂 逆笠型ペンダント		来客用手洗 ペンダント
復元区分	A		B
参考資料	創建時 食堂写真	創建時 食堂写真	類例建物
画像			 有隣荘1階洋風トイレ照明（画像提供： 公益財団法人 大原芸術財団 大原美術館）
	 古写真（個人蔵）	 古写真（日本建築学会建築博物館蔵）	
部屋名	別棟次の間・夫人室 ペンダント		書斎 ペンダント
復元区分	B		B
参考資料	虎山荘 書斎照明（京都府京都市）		虎山荘 和室照明
画像	 画像提供： 杉並区 教育委員会		 画像提供： 杉並区 教育委員会

第6節 展示設計

(1) 展示活用ストーリー

「第5節 内装および家具調度の復元」では、主に内装を復元する部屋の考え方と、家具、照明器具の復元内容を中心にまとめた。それ以外の調度品については、展示設計で検討を行い、実際の展示品製作は工事と同時期に別途契約した展示業務として実施した。

展示設計では、建物内では来訪者が見学できる部屋のうち、家具調度まで整えた部屋を中心に、調度品製作のほか、模型や映像、屋内外の誘導サインの設計も行った。

建物内の展示は「伊東忠太が設計した住宅」と「近衛文麿の居宅」という特徴を説明するため、二人の概要と昭和初期の時代の動きに触れ、家具や調度を含めて復元された室内を体感しつつ、模型やゆかりの品々から歴史の詳細を知り、終戦と近衛の最期へと案内をつなぎ、別棟で休憩する動線とした。

庭園も含めた施設全体では、荻外荘の建物の説明に加え、荻外荘南側の庭園や当時の荻窪の景観（「荻窪の原風景」）など、立地の特徴を説明したうえで、近接する荻窪の庭園への散策へ案内することを目的とした。

(2) 展示設計の考え方とプロット図

① 公開・活用区分と展示計画

実際の展示活用設計に当たっては、復元・公開するが入室禁止、復元・公開し入室可能、施設貸出等で利用可能、管理スタッフが使用という公開・活用区分をしたうえで、部屋ごとの展示方針と展示手法を決定した。

② 展示設計の基本方針

- ・誘導・解説サインとWEB解説、パンフレットを併用し施設案内を行う。日本語・英語の2か国語対応とする。
- ・過度な説明を避けるため、パネルは設置しない。
- ・各部屋の説明や古写真等の資料は、QRコードを読み込むことで確認できるかたちとした。
- ・近衛文麿居住期の荻外荘模型や近衛愛用車模型を設置し立体的でリアルなモデルで当時をイメージさせる説明を行う。
- ・解説映像モニターは食堂に設置。可動モニタースタンドとし空間の雰囲気を損ねないテーマカラーの仕上げとする。
- ・AR・VR再現映像タブレットは広縁に各2台ずつ設置し、インタラクティブな展示演出を行う。
- ・屋外のサイン基板は庭園設計で計画し、解説案内板のデザインを行う。

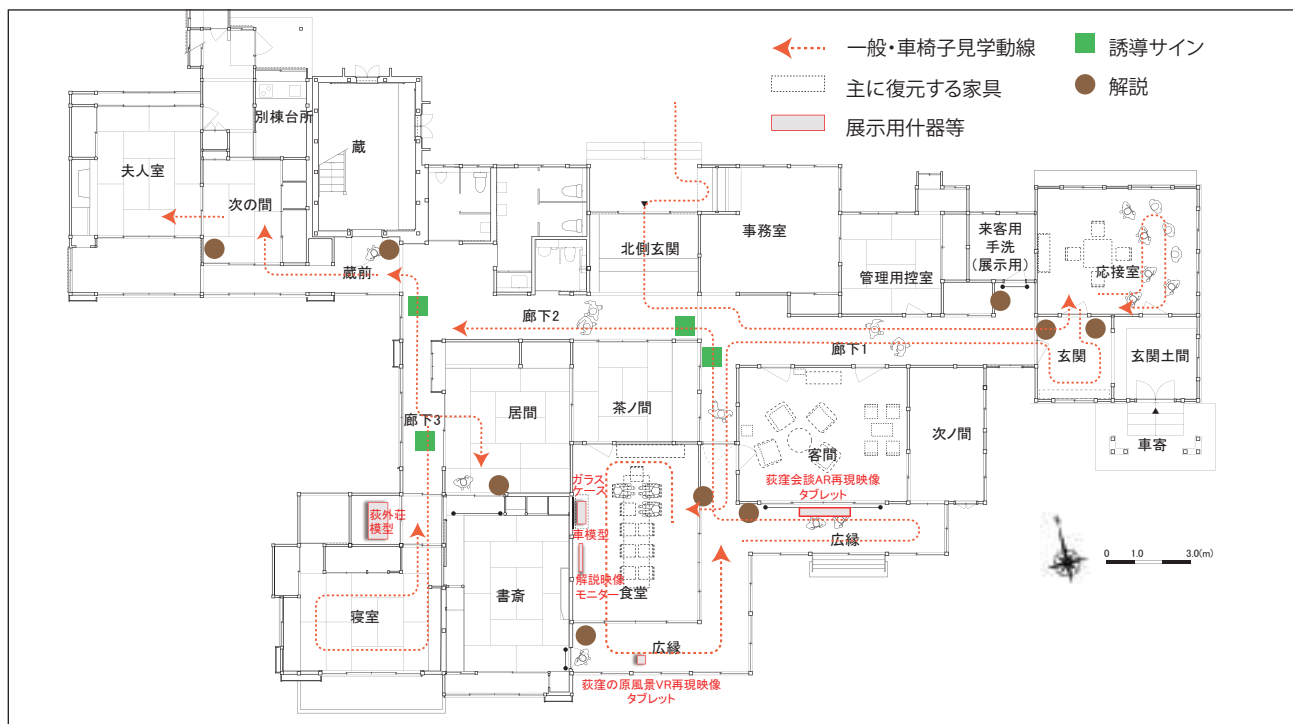


図 4-24 展示計画平面図

③ 展示構成表

表4-8 荻外荘の主な展示構成					
室名	整備の方針	来場者に伝える情報	展示手法	実物展示	二次資料
応接室・玄関	- 家具、内装を再現する部屋。 - 残った龍の敷瓦や古写真などから当時の内装を復元し、来訪者に中国風の応接室の雰囲気を感じてもらおう。 - 入澤時代の家具をそのまま引き継ぎ、近衛文麿が掛け軸などを掛けて使っていたというコンセプトとする。	建物、家具調度品の復元の意図を簡単に紹介。特に中国式の応接室を紹介。	解説サイン	現存する敷瓦	「荻外荘」扁額（レプリカ） - 天井画（レプリカ） - 王一亭掛軸（レプリカ）
来客用トイレ	当時最新であった、陶器製の腰掛け便器と手洗いを設置し、来訪者に当時のトイレの雰囲気を伝える。	昭和初期に当時最新だった洋式トイレがどのようなものか、陶器製便器や手洗いを再現。	解説サイン		- 昭和初期便器（レプリカ） - 昭和初期手洗い（レプリカ）
食堂	- 家具・内装を再現する部屋。 - 実際に家具を使えるようにするため、内装を再現する他の部屋よりもガイドダンスなどの場として柔軟に活用。	- 近衛文麿の人物紹介。 - 政治家や文化人が好んだ荻窪。 - 戦前の政治の舞台であった荻外荘。 - 建物の変遷（創建～移築～復元）	解説サイン 模型 映像による人物・歴史紹介	キャビネット 内に近衛家の食器類	- 近衛文麿肖像（レプリカ） - 車模型
客間	- 家具・内装を再現する部屋。 「荻窪会談」の古写真で知られる歴史的な場であり、当時の古写真の情景を、家具や小物まで含め、そのまま再現する。	「荻窪会談」の情景をリアルに再現。 - 会談時の映像をもとに、再現した空間を見ながら、往時にタイムスリップしたような体験を提供。	- ガイド解説 - ARの活用		- 絵画や花、工芸品（レプリカ） - キャビネットの中（レプリカ） - テーブル上の小物（レプリカ・一部購入品）
広縁	復元にあたって、荻外荘を印象づける南側外観となるため、広縁外部は写真撮影の重要なスポットとする。	近衛文麿が広縁から見た荻窪の原風景を映像などで感じてもらう。（現代との比較）	VRの活用		
茶の間・居間	内装を復元する部屋ではないが、書斎へ至る通路であり、また畳敷きの部屋として活用する。	近衛家ゆかりの家具を展示する。		近衛家由来の調度品	
書斎	- 近衛文麿が荻外荘購入後に自身の好みに合わせて改修した部屋。 - 昭和20年に近衛文麿が自決した部屋として知られる。	近衛が亡くなった部屋である事実を、当時の近衛の使っていた家具調度をもとに書斎として整え、公開するが、立ち入りは禁止とする。	解説サイン	書類棚 座卓 床の間に近衛の書	「恭黙思道」扁額（レプリカ） - 近衛色紙（レプリカ） - 屏風、香炉（レプリカ）
蔵	- 近衛文麿居住期に作られた二階建ての蔵。現代まで荻外荘に残った品々の一部が保管されている。 - 今後も蔵として収蔵品を収納。 - 蔵の扉があり、のぞき込みたくなるような配置のため、来訪者に興味を持ってもらえるようなしかけを作る。	- 内部には入らず、廊下から見学者が収蔵品などを見ることができるようにする。 - 収蔵品を入れ替えるなどして、来訪者にも気軽に実物を見てもらえるようにする。	解説サイン	近衛家の文化財（収蔵されている実物）	大礼服（レプリカ）
別棟・別棟廊下	- 近衛文麿居住期に作られた、南側の小庭を眺める二間続きの和室。 - 北側から段差なく入れるため、車椅子のかたでも利用できる。 - ゆっくり座ってくつろげる場所であり、トイレや台所もすでに設置されているため、軽飲食や休憩の場として活用する。				近衛文隆肖像（レプリカ）

(3) 展示製作品（調度品）

調度品の復元は、以下の4種類に区分し、精度をAからCに分けて製作を行った。

A：資料や類例などの調査に基づき、当時の仕様（主な材料、外観、製法）を復元。実際の所蔵品（現物）をもとにレプリカを作製する。

B：資料や類例などに基づき復元するが、資料が少ないため外観のみを復元。実際の所蔵品の写真などからレプリカを作製する。不特定多数が使用する可能性があるため、仕上げなどはメンテナンスしやすい材料、下地とする。

C：雰囲気に合わせて作る、あるいは購入。

D：現物、あるいは所蔵品をそのまま展示。

室名	復元項目	復元の考え方	数量	材料
玄関	扁額「荻外荘」	B 現物からレプリカを作製。	1	木製
応接室	コンソールテーブル上の壺、皿、カップ	C 類似した骨董品を購入。白磁鉄砂雲竜文壺。	1	磁器製
応接室	掛け軸（小）	B 書、軸装。杉並区所蔵品を元にレプリカを作製。	2	紙、絹
客間	花籠	B No.8飾り台の上。藍胎漆器。古写真から外観のみ再現。	1	竹製
客間	造花	C 矢車菊、ナデシコ、アガパンサス、花菖蒲。	1束	造花
客間	掛け軸	C 水墨画、軸装。陽明文庫所蔵品の写真データから掛け軸を作製。	1	絹
客間	ニシキエビの壁掛け	B 土台木板、レプリカ	1	樹脂製
客間	アオウミガメの剥製	B レプリカ	1	樹脂製
客間	ナポレオンハット時計	C 古写真から外観の近い製品を購入。	1	木製、金属金具
客間	御所人形（大）、銀細工道具（キャビネット上段）	C 陽明文庫所蔵の人形および銀細工道具の写真や、杉並区教育委員会所蔵人形を元に、外観のみ再現するレプリカを作製展示。	多数	樹脂製

室名	復元項目	復元の考え方	数量	材料
客間	銀細工雑道具（キャビネット中段上）	C 陽明文庫所蔵の銀細工道具の写真を元に、外観のみ再現するレプリカを作製展示。	多数	樹脂製、一部布製
客間	賀茂人形（小）（キャビネット中段下）	C 陽明文庫所蔵の人形写真を元に、外観のみ再現するレプリカを作製展示。	多数	樹脂製
客間	御所人形（大）（キャビネット下段）	C 古写真より 5体程確認。陽明文庫所蔵の人形写真を元に、外観のみ再現するレプリカを6体作製展示。	6	樹脂製
客間	ガラス製コップ	C 丸テーブルの上。骨董品を購入。	4	吹きガラス
客間	平皿	C 古写真ではコースターとして使用。骨董品を購入。	4	陶器
客間	たばこ盆	C 骨董品を購入。	1	金属製
客間	うちわ	B 昭和15年7月会談時の写真をもとに製作。	5	竹製、紙
客間	うちわ立て	C 昭和15年7月会談時の写真をもとに製作。	1	木製
客間	卓上メモ帳（卓上備忘録）	C 丸善の復刻版小型卓上便箋 6000シリーズを購入使用。	4	紙
客間	鉛筆	C 当時の鉛筆を購入、不足分はレプリカ製作。	3	木製
客間	ラジエーターグリル	B 古写真のイメージで外観再現レプリカを製作、展示。	1	樹脂製
来客用手洗	洋便器	B 有隣荘を参考に外観再現レプリカを製作、展示。昭和2年には洋便器（腰掛け便器）が販売開始。	1	樹脂製
来客用手洗	洗面台	B 有隣荘を参考にレプリカ製作。	1	樹脂製
食堂	油彩画	B 近衛文麿の肖像画（杉並区教育委員会所蔵）のレプリカを作製して展示。	1	紙、額装
書斎	扁額「恭黙思文齋」	B 近衛家旧蔵の書（杉並区教育委員会所蔵）のレプリカを設置。	1	紙、額装
書斎	仏壇脇色紙	B 近衛家旧蔵の色紙書（杉並区教育委員会所蔵）のレプリカを設置。	1	紙、額装

室名	復元項目	復元の考え方	数量	材料
書斎	屏風	B 近衛家旧蔵の屏風（杉並区教育委員会所蔵）のレプリカを設置。	1	紙、2曲1隻
書斎	床の間掛け軸	D 陽明文庫所蔵の書を設置。	1式	紙、絹
書斎	床の間調度	B・D 近衛家旧蔵の調度（杉並区教育委員会所蔵）既存品を設置。香炉のみレプリカ製作設置。	1式	樹脂、金属製
書斎	桐タンス	D 近衛家旧蔵の調度を展示（杉並区教育委員会所蔵）。	1	木製
庭園	ガーデンテーブルおよびイス	B 近衛家旧蔵のテーブルと椅子（杉並区教育委員会所蔵）を元にレプリカを設置。	1式	陶製
別棟夫人室	油彩画	B 近衛文隆の肖像画（杉並区教育委員会所蔵）のレプリカを作製し展示。	1	紙、額装
蔵	大礼服	A 近衛文麿の肖像写真と類例をもとにレプリカ製作、設置。	1式	布、金モール

(4) 展示製作品 模型

荻外荘についての理解を深めるため、近衛文麿居住期の庭園と建物の模型を製作した。スケールは1

／100とし、詳細が不明な北側建物については、平面表示（プレート表現）とし、車寄には近衛文麿の公用車を配置した。

NHKアーカイブ「日本ニュース第7号」にも映っている近衛文麿の総理専用車は、当時の古写真などから「クライスラー・インペリアル1937年製」と推定されたため、美術家・熊田憲明氏に模型製作を依頼し、食堂チェスト上に1／8サイズの模型を設置した。



図 4-25 模型計画図

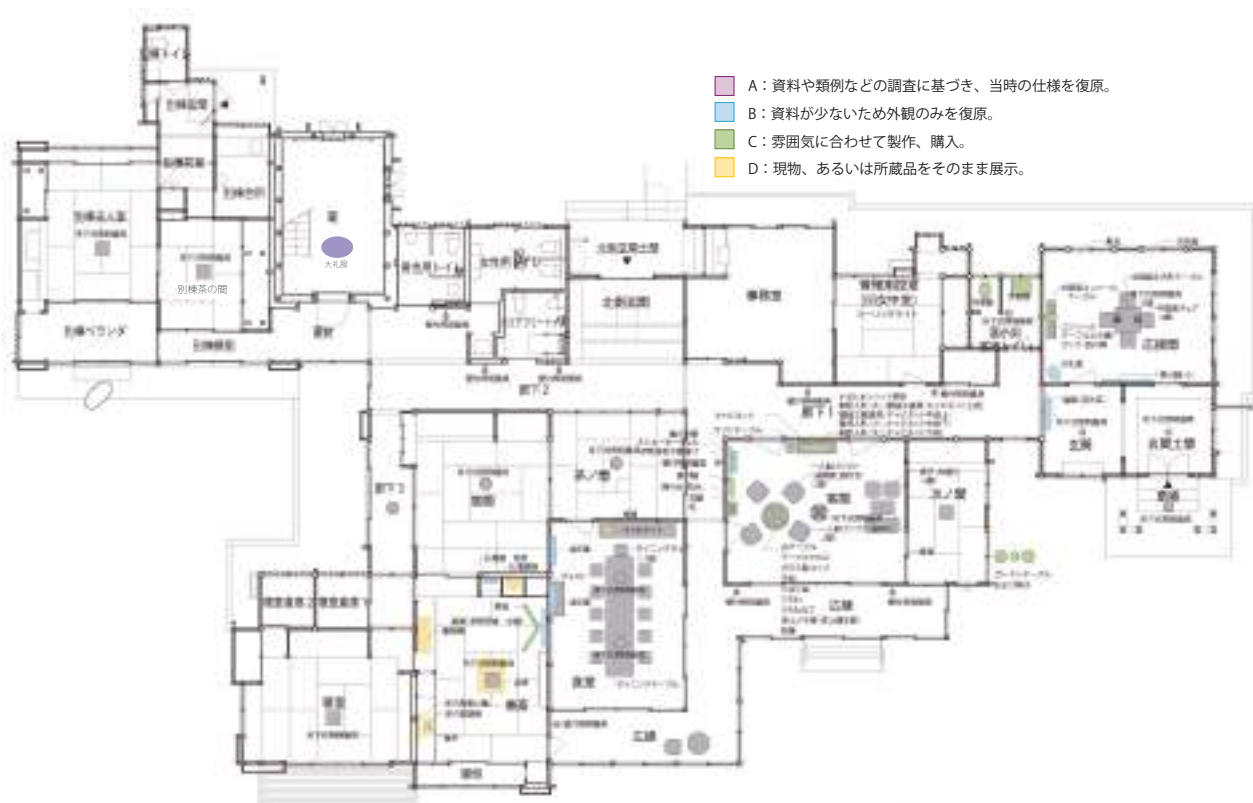


図 4-26 調度品配置図

大礼服

近衛文麿の体格や大礼服を着用した近衛の写真を基に、金モール刺繍をはじめとする当時の技術を用いて、近衛の有爵者大礼服のレプリカを製作した。今回の制作にあたっては、戦前に大礼服を製作していた洋服店の仕立職人・服部晋氏や、数少ない金モール刺繍職人・辻章氏の協力を得て、日本大学商学部教授である刑部芳則氏の監修のもと製作した。



写真 4-6 広縁外周西面 ガーデンテーブルおよびイス



写真 4-4 客間 加茂人形（小）



写真 4-7 書斎 扁額「恭黙思道」および屏風



写真 4-5 玄関 扁額「荻外荘」



写真 4-8 蔵 大礼服

(5) 解説映像

解説映像は、食堂に可動式スタンド型モニター（50インチタッチモニター）を設置し、映像再生することとした。映像は歴史映像2本と工事の記録映像の合計3本に、別途制作・既存の記録映像を新たに制作し、来訪者が自由に選択できるようにした。

工事の記録映像については3分程度のダイジェスト版と15分の本編を選択できるようにした。

設計段階では映像の企画と構成案までを作成し、想定される映像尺のなかに訴えたい内容が納まるよう、各シーンとその内容、必要な画像イメージや仮のナレーション案までを作成した。

それぞれの映像の概要は以下とした。

歴史映像1. 荻外荘と近衛文麿

荻外荘と近衛文麿の繋がりを往時の時代背景から紐解き、荻外荘の役割や出来事（荻窪会談・荻外荘会談・自決等）や荻窪の原風景を紹介するとともに、国史跡となった荻外荘が、歴史的にも重要な「場所」であることを伝える。

- ・7～8分程度 日本語ナレーション／英語字幕

歴史映像2. 荻外荘と伊東忠太

近代日本を代表する建築家であり荻外荘の設計者である伊東忠太にスポットをあて、荻外荘が現存する伊東忠太の数少ない邸宅建築であるという荻外荘の価値を伝える。

- ・7～8分程度 日本語ナレーション／英語字幕

工事記録映像 国指定史跡 荻外荘（近衛文麿旧宅）復元整備の軌跡

荻外荘が入澤達吉の別荘として建てられてから近衛邸となること、昭和35（1960）年の巣鴨への一部移築から令和の復元に至るまでの歩みと工事の記録を後世に伝える。

- ・本編15分程度／ダイジェスト編3分程度
- ・日本語ナレーション／英語字幕

歴史記録映像 日本ニュース第6号・第7号

昭和15年の荻窪会談の様子を伝える当時のニュース映像を流す。

日本ニュース第6号「山荘に想いを練る近衛文麿公」

日本ニュース第7号「新体制の確立へ近衛内閣成立」

大礼服映像. 近衛文麿大礼服復元の軌跡 —近代日本の歴史を彩った大礼服—

大礼服の概要をはじめ、レプリカ製作の過程とその意義も伝え、大礼服について知ることのできる映像とした。

- ・本編17分程度／ダイジェスト編5分30秒
- ・日本語ナレーション／英語字幕

(6) AR および VR による解説

来訪者により深く、荻外荘の歴史や価値について理解していただくため、「客間での政治会談」「荻窪の原風景」というテーマで、再現した内装にARやVRを重ね、当時の情景などを理解できる解説とした。

解説は専用のタブレットを部屋の前に設置することとし、来訪者がタブレットを操作することで現在の室内外の景観に当時の映像を重ね、タブレット上で当時の情景を再現できるような展示とした。

AR「荻窪会談AR」

「客間」では、昭和15（1940）年の報道写真等をもとに忠実に再現した内装や調度品に、客間手前に設置したタブレットをかざし、報道写真に写っていた政治家たちの動きも加えたAR効果により来訪者に興味の喚起と驚きを与え、実際にその場にいるかのような臨場感が感じられる効果を演出する。

荻外荘を舞台に歴史に残る「荻窪会談」が行われた事実とその意味を、臨場感をもって伝える。

- ・ARコンテンツ／人物3DCG制作
- ・荻外荘会談、登場人物についての解説
- ・1分程度日本語ナレーション／英語字幕

荻窪の原風景再現VR映像（広縁から南側庭園）

荻外荘を訪れた人が、近衛文麿が暮らした当時の景観を体感できるよう、荻外荘のある高台から見えた荻窪の原風景をCGで製作し、タブレット上で四季に応じた庭園の姿を再現する。

- ・VRコンテンツ／当時の植栽・風景をCG制作
- ・荻窪の原風景（武蔵野の面影、郊外の別荘地、富士山）についての解説
- ・1分程度
- ・日本語ナレーション／英語字幕

第7節 庭園および外構

(1) 整備の基本的な考え方

① 庭園整備

荻外荘の庭園整備は、「荻外荘保存活用計画」大綱にある「屋敷内の樹林は、荻窪の歴史と共に育まれた現在の景観を維持し、豊かなみどりを享受できる場として整備する」という考え方のもと、ゆたかな住宅地の庭園景観を残しつつ、善福寺川崖線に自生するアカマツに囲まれ、カエデ類が植栽されていた近衛文麿居住期の荻外荘の庭園の姿を段階的に再現していくこととした。

このため、今回の整備では南側斜面にツツジ類などの低木を、建物周辺には草花類の植栽を新植し、四季の植栽景観を充実させていくこととした。

この考えのもと、庭園設計の方針は以下とした。

- ・文麿居住期からの樹木（アカマツ、スダジイなどの大木）などは、今後も整枝・剪定などの管理を行い、みどりを保全し、景観を維持する。
- ・実生木を撤去し、日照条件を改善して アカマツなどの樹木による復元的補植を検討する。
- ・住宅地の静かな環境や、隣地との干渉を防ぐため、史跡内にふさわしい落ち着いた外観の遮蔽植栽や柵などを設置していく。

② 屋外施設整備

庭園内に新設する施設は、史跡の価値を守りつつ、それらを高めることを目的とする。このため庭園内に新設する施設は、以下の方針のもと、史跡の価値や、周辺景観などに配慮した材料や工法を検討する。

荻外荘と調和した施設デザイン

施設デザインは、荻外荘の建物や周辺景観に調和した色や外観とする。

地下遺構の保全と施設整備

既往の発掘調査に基づき、遺構に影響を及ぼさないよう施設および構造物の基礎の位置を決定する。構造物の基礎を設置する場合、地下遺構を壊さないよう盛土を行うか、または 地下部に基礎を設けない構造を検討する。

(2) ゾーニング

① ゾーニングの考え方

庭園内は、報道写真や古写真などで知られる荻外荘を代表する場所、主屋北側や進入路などあまり資料がない場所、近衛文麿居住以降の建物改変に伴って改修された場所などがある。

今回の整備では、成長により外形が変わってしまった樹木なども存在しているが、近衛文麿居住期の荻外荘の庭園の姿を目標としつつ、杉並区のみどりを守るため、現状の樹木を残しながら、荻窪の住宅地を代表する風景を育てていくこととする。

このため、庭園はゾーンごとに整備の考え方をまとめ、段階的に整備を行っていく。

ゾーンA

報道写真や古写真などにも残されている荻窪の住宅地としての代表的な景観を目指すゾーンとする。

ゾーンA 正門付近

報道写真や古写真などにも残されている荻窪の住宅地としての代表的な景観を目指すゾーンとする。

正門は、文麿居住期からの姿を残す貴重な遺構であり、アカマツやサワラなどの針葉樹に囲まれた荻外荘を代表する景観である。公開後は荻外荘のメインエントランスとなる。

- ・アカマツなどの針葉樹を補植し、段階的にかつての西側正門周辺の景観を再現していく。
- ・新たにメインエントランスとなることから、史跡柱の設置、正門周辺の補修を行う。
- ・旗竿地とエントランスとの間には、空間を区切り、隣接する建物を遮蔽する生垣（高さ3.0m程度）を設置する。
- ・西側正門裏のムクノキは、大きく成長し過ぎた実生木と思われるため撤去し、自然の景観を演出するため新たにアカマツを植栽する。

ゾーンA 南側斜面

既に供用されている南側広場からの荻外荘の景観は、創建時古写真にもあるようなアカマツに囲まれ、斜面地にツツジが植えられた印象的な景観を再現していく。

- ・斜面南側の樹木を伐採してサツキツツジを植栽し、ツツジが映える斜面として景観を整える。その際、生育が悪いツツジは、植え替えとする。
- ・近衛文麿が「書斎」から眺めた「白百合」を植栽する。植栽箇所は、低木等で覆われているため、既存木の剪定、移植、伐採などを行い、ユリが生育できるスペースを確保する。
- ・公園との境界にある柵（高さ2.0m+忍び返し0.5m）の忍び返し部分を外し、公園部分と一体的に見えるよう高さ2.0mの柵とする。

ゾーンA 南側玄関周辺

南側玄関の周辺は、古写真に見られる当時の景観の再現や、復元する建物とともに近衛文麿の生活を感じることができる空間とする。

- ・移築建物東側周辺は、古写真を参考に、遺構に影響がないよう中低木による植栽帯を設ける。
- ・南側車寄は、古写真に見られる砂利敷きとする。
- ・砂利敷きと植栽地との境は、古写真にあるような玉石縁石で区切る。
- ・車寄前の広場南側には、報道写真で確認できる桂垣を復元する。
- ・近衛家ともゆかりの深いシダレザクラを新植し、建物の正面としての姿を整えていく。

ゾーンB

部分的な古写真や記録などで状況が推定できるため、雰囲気を残しつつ景観を整えるゾーンとする。

園路と北側植栽

西側正門から荻外荘の入口に至る東西進入路は、既存の樹木も活かして静寂な雰囲気を守りつつ、来訪者が歩きやすい空間づくりを行う。また、本ゾーンは、東西進入路は近衛文麿居住期の湾曲した園路の形状とは異なっている。発掘調査では、当時の砂利道が確認されている。

東西進入路は、当時の砂利道の雰囲気を残しつつ、樹木の根を避けながら砂利を敷き均す。正門から建物入口までと、車イス用駐車場から荻外荘入口までの園路は、車イス使用者等が通行できる幅員の舗装とする。

東西進入路の北側フェンスは撤去し、隣接する建物およびコンクリート壁を遮蔽するため、高さ3.0

mのシラカシの生垣を植栽する。

東門から入った北側の民地沿いは目隠しのため、生垣を設置する。なお、民地沿いには、地下遺構があるため、植栽柵を設置し植栽を行う。

主屋北側庭園・中庭

主屋北側は、近衛文麿居住期には付属屋などが立ち並ぶ荻外荘のバックヤードとして使われていたと想定される。主屋北側庭園・中庭が整えられた時期は不明であるが、井戸や灯籠などは文麿居住期から存在していた可能性がある。東西通路に面した場所として、現状の景観を整えつつ、大きな改変を加えずに残していく。

東西進入路沿いなどの生垣は、枯れて途切れていたり、樹勢が弱っていたりするため、現況の生垣を撤去し、新たに生垣を植栽する。北西側の東西進入路の幅員の拡張にあわせ、一部の生垣の線形を変更する。

北側玄関前の通路は、東西進入路分岐から玄関前のクランク部までは、現状と同様の敷石のデザインとし、幅員を幅員1.4mへ拡張する。庭園井戸やその周辺の添景物は現状のまま保存する。

別棟北側や南側の中庭は、建物からの景観に配慮しつつ、現状を活かした小規模な庭として整える。

ゾーンC

当時の状況を示す資料は乏しいが、古写真や現状から推定、または他と景観を合わせるゾーンとする。
東側道路沿い

- ・東側道路沿いは、古写真からアカマツ林であったと推定される。当時から樹木を残し遮蔽植栽するとともに、段階的にアカマツなどを補植し、一部の古写真に写る植栽の景観を再現していく。
- ・東門は、古写真では石柱のある門であった可能性もあるが、位置が確定できないため、復元と誤解されるようなデザインとせず、新設する柵のデザインにあわせたものを設置する。
- ・現状のフェンスを撤去し、南側敷地に設置されている柵と同様の柵を連続して設置する。

ゾーンD

史跡の指定範囲外のため、バックヤードとして整備する。

(3) 動線

① 来園者動線

正門と東門をつなぐ動線（東西進入路）は、開園時間中は無料開放とする。

開園後はＪＲ荻窪駅や大田黒公園方面からの来園者動線が見込まれるため、正門をメインアプローチとし、荻外荘入口（北側玄関）まで誘導する。東門は、角川庭園や荻外荘南側の広場への行き来に近い出入り口として利用する。自転車を利用する来園者は、ゾーンＤ内に設置した駐輪場に停め、西側正門に回り荻外荘入口（北側玄関）に至る。

② バリアフリー動線

バリアフリー動線として、西側正門から荻外荘入口（北側玄関）までの動線および自動車で来園する人の駐車場から荻外荘入口（北側玄関）までの動線を確保する。車イス使用者等の駐車場と荻外荘の敷地は、地面の高低差があるためスロープを設置し、車イス使用者等が行き来できる動線を新たに設ける。

③ 管理用動線

管理用車両は旗竿地内に駐車し、物資などを運ぶものとする。ただし、樹木などの管理の際には東門から管理用車両が進入する。なお、建物北側の植栽の管理にあたっては、旗竿地内の通路に停車して樹木の管理を行う。



図 4-27 ゾーニング図